



1851年ロンドン万国博覧会と労働者

重富, 公生

(Citation)

国民経済雑誌, 206(5):33-47

(Issue Date)

2012-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008442>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008442>



1851年ロンドン万国博覧会と労働者

重 富 公 生

国民経済雑誌 第206巻 第5号 抜刷

平成24年11月

1851年ロンドン万国博覧会と労働者

重 富 公 生

空前の数の来訪者を集めた1851年のロンドン万国博覧会は、「全諸国の産業成果の大博覧会」という正式名称が示すとおり、労働者の祭典という性格も備えていた。本稿は、その労働者たちがロンドン万博とどのようにかかわることになったのかについて、まず万博の主催者側の労働者階級の受入に向けた対応を観察し、一方で労働者たちが万博をどう受け入れたかを、労働者の19世紀レジヤースの文脈のなかで考察したい。主催者たちは、万博に労働者がさまざまな形で積極的に関与することがその成功のための不可欠の前提とみて、そのための条件を整えようと務めていた。また万博は主催者だけではなく中産階級にとっても、労働者階級を社会的に和合させる啓蒙的・教育的機能や健全なレジヤースとしての機能を有するべき催しであった。労働者たちは、しかしながら、そのような「期待」とは離れた土俵で万博を受容することになったのである。

キーワード ロンドン万国博覧会、労働者階級、レジヤース、幸福観

1 はじめに

社会的統合と階級的調和のシンボルとしての1851年ロンドン万国博覧会という言説は、万博の組織者・主催者たちのみならず、ヴィクトリア朝イギリスの社会史においてしばしば用いられる常套表現となっている。とくに同時代の多くの評者にとってロンドン万博は、イギリスの産業的達成を中心とする数々の偉業を世界に誇示する場であっただけでなく、労働と労働者階級を社会的に認知させると同時に、労働者たちにも国家におけるその地位を認識させることにより彼らの自尊心 (self-respect) を覚醒させる役割を果たすことが期待された。さらに万博は、イギリス国民に向けて現実と世界を結ぶための、またとない教育的役割を果たす学校であり一職人たちにとって良きデザイン教育の場、消費者にとって良きテイストの教育の場—博物館であった。そしてそのことによりロンドン万博は、「暗黒の40年代」「飢餓の40年代」の苦い経験を背景に、主催者や中産階級、そして社会改革者たちが何よりも望んだような、労働者階級を社会的に馴化させる「健全な (rational) レジヤース、レクリエーション」、 「穏健な娯楽 (wholesome amusement)」の役割を果たすことが期待されたのであ¹⁾た。本稿は、労働者階級のかかわりかたを主眼にロンドン万博を観察しようとするものであ

る。すなわち、万博の組織者・主催者側は労働者をどう受け入れ、労働者たちは万博をいかに受容（しよう）したかを、レジャー史の近年の研究成果も視野にいれながら論じたい。

2 万国博主催者側の労働者受入方針

「産業の祭典」である万国博は、空前の数の全国各地の労働者を見物客としてロンドンに受け入れることを想定していた。ピータールー事件からチャーティスト運動にいたる19世紀前半の一連の不穏な経緯は、王立委員会や万博の関係者の記憶から醒めることはなく、労働者の受入にあたって慎重かつ周到な準備が必要であることは早くから認識されていた。1851年博覧会王立委員会の委員長を務めていたアルバート公は、労働者階級生活改善委員会（Society to Improve the Condition of the Working Classes）の委員長の職にもあり、その立場でロンドン万博にも労働者向けモデル住宅を実際に出品、最高位のカウンシル・メダルを受賞していることは良く知られている。したがって、労働者たちの万博への受入についてはもともと積極的であった。彼は労働者の参画を促進するための組織として、労働者階級中央委員会（Central Working Class Committee）を結成していたが、ヘンリー・コール（Henry Cole）が事務局長を務めることになったそのメンバーには、ディケンズやサッカーといった著名人、4人の国会議員、サザンプトン市長、マスコミ関係者、聖職者、3人の元チャーティストなど多彩な顔ぶれが揃っていた。1850年5月に開かれた最初の会合では、この委員会が、執行委員会や建築委員会など同様に万博の正規の委員会として認められるよう要望することが決議された。王立委員会の第16回会合（1850年5月9日）において、オックスフォード主教から提出された請願書が議題として取り上げられている。

このオックスフォード主教はウェストミンスターで開かれた会合（日付は不明）の席上で、「労働の尊厳について」と題するつぎのような演説を行なっている。主教の根本的な主張は、来たるロンドンでの万国博は技術と文明の進歩とキリストの教えとの結びつきを讃えるものであると同時に、労働と労働者の尊厳を顕彰するものである。労働者をめぐる今日の状況はけっして芳しいとはいえない。第一に生産の現場の不衛生な環境は深刻なものがあるが、そのような環境で働く労働者を保護する発明品が少しずつ生み出されており、やがて科学的成果がいっそうの改善をもたらすに違いない。しかし第二に、あまりにも細分化された工程間分業によって個々の労働者の関心のごく一部の作業に集中し、生産の全体が見えなくなっている。博覧会に訪れた労働者たちはその偉大な成果を目の当たりにすることによって、全体の中での自らの労働の位置づけ、意味と尊厳をはっきりと認識することになる。第三に、しばしば利害が対立する大資本家と小生産者、あるいは経営者と労働者は、それぞれの役割分担を伴いながら協働した成果が展示品となっていることに思い至り、日頃の対立の根を除去し、より良き関係を構築することにつながるであろう、と。そしてこの請願書には、この

委員会の主要な目的として、つぎの三点が明記されている³⁾。

1. 連合王国全土の労働者諸階級に、万国博覧会の性質と目的について知らしめる方策を講じること。
2. 労働者諸階級の博覧会来観を促進すること。
3. 労働者諸階級が来観のために首都に滞在するにあたってその宿を確保する手段を検討し、それに関する必要な情報を公開すること。

この請願書にたいして会合では、王立委員会のつぎのような決定を回答とすることとなった。すなわち、王立委員会としては労働者階級中央委員会の主張・趣旨に賛同するものであり、労働者関連の諸事項について適時相談・情報交換させていただきたい。そのさい中央委員会は、われわれと協同するほかの独立した各種委員会と同様に独立した団体の立場にとどまるのが適切であり、その趣旨を実現していくにあたり、王立委員会の特別の認可は不要である⁴⁾と考える。結局王立委員会は、委員にチャーティストや社会主義者が含まれているような「偏向」ぶりには強い反感を示し、たとえそのことによって一部の支持を失ったとしてもけっして委員会を王立委員会傘下の正規の機関とはしないという断固たる姿勢を示した。この委員会はわずか1ヶ月ほどで解散せざるをえなかったのである⁵⁾。

労働者階級中央委員会が正規の委員会として認可されなかったことにより、万博主催者側では労働者にかかわる業務の直接の窓口がなくなってしまった。アルバート公の秘書を務めていたチャールズ・グレイは、公の意向を汲むためにも何らかの手だてが必要と考えていたし、政界から王立委員会のメンバーとなったロバート・ピールは、万博実施のための地方委員会 (Local Committee) を通じて労働者との関係を強化する必要性を強調していた。事実、全国各地から寄せられた万博への支持や協力状況についてのレポートでも、労働者階層の間で万博についての理解と協力が得られているかが、その地方の支持を獲得するうえで決定的に重要であることが報告されている。王立委員会は、地方委員会を通じて、労働者たちに (場合によっては職工学院 Mechanics Institution などの組織⁶⁾を介することによって) 万博のメリットを認識させ、支持と寄附金を募るよう働きかけた。

王立委員会の第17回会合 (1850年5月16日) には、国内各都市での労働者階級の万博支持と協力の状況が報告されている。具体的には、その内容によっていくつかのパターンに分けられる。第一に、一般の寄附金とは別に、労働者が自主的に寄附を募るというもの (Blackburn, Birmingham, Carlisle, Derby, Dover, Edinburgh, Hertford, Huddersfield, Jersey, Leeds, Newport, Newcastle-upon-Tyne, Norwich, Oxford, Preston 各市等、以下同様)。第二に、労働者が博覧会见物に出かけるための積立基金ないしクラブを創設する (Bradford, Bridport (Friendly Society), Bromsgrove (Mechanics' Club), Northampton (Provident Society), Preston,

Stirling, Whitehaven, Worthing)。たとえばサザンプトン (Southampton) 市では、一般の寄附金に加えて、労働者からの寄附金が二日間で40ポンドに達した。同市長からの手紙には署名文書が添えてあり、つぎのように述べられている。一般の寄附金とは別に、週1ペニーの積立により労働者が博覧会期中のロンドンを訪問するための原資とする「博覧会旅行基金」が創設された。同市では「入場準備基金」(the Admission and Provision Fund) なるものも創設されたが、これはそのメンバーだと「シリングの形をした銀の鍵を持参して博覧会の入場口に行く」ことができるというものである。第三に、労働者の代表が地方委員会に新たに加わる (Aberdeen, Darlington, Woolwich)。第四に、職人に万博出品の完成度を高めるために援助する「職工基金」創設のための寄附を募る (Bolton)。第五に、出品希望者に必要な情報と援助を与える委員会を創設する (Stirling)。第六に、市長が協力を促すために労働者階級の会合を招集する (Dundee)。そして第七に、万博開催にあたっての協力と賛同を呼びかける労働者連盟 (Workmen's Association) を結成する (St. Austell⁷⁾)。

労働者層の積極的参加をさらに進めようとする都市も少なくなかった。エディンバラでは、市長臨席で開催された臨時委員会 (4月3日) の決議を受けて、来たる国際的産業博覧会に向けた全市の労働者階級への呼びかけを行なっている。内容は概略つぎのようなものである。

市のすべての職工 (the Operatives) は、このような産業の技巧コンペティションの場を、自己の鍛錬と社会改良の良い機会と捉え、自らの労働の営みにふさわしい社会的認知と地位を獲得するために多に活用することをしっかりと意識されたい。おそらく文明開闢以来はじめて、その技巧を一堂に会する催しとなると思われるからである。

そして14の業種別に逐次会合が開かれ、会合日、および各会合に委員会のメンバーが出席する予定であることがアナウンスされている。⁸⁾

3 「シリング・デー」の設定

ロンドン万国博への膨大な数の労働者の参観を可能にした措置として、シリング・デーの設定があげられることは言うまでもない。すなわち、会期中の5月26日以降、月曜から木曜までの週4日間の入場料金をわずか1シリングとするものである。入場料は、会期中何度でも入場可能で、その保持者のみが初日 (5月1日) の開会式参列を許可される通し切符 (seasonal ticket) が3ポンド (女性2ポンド)、その後2日間は1ポンドであり、その高価格は、開会直後3日間を名実共に上流階級のための祭典の場とした。それ以降5シリングに下げられたが、それでも労働者層が気楽に参観するにはほど遠い高額の料金設定であった。

シリング・デーの設定案は、おおかた好意を持って迎えられたが、その時期や料金自体について異論が唱えられることもあった。ウェストミンスターの商工業者 (tradesmen) から

ウェストミンスター⁹⁾の地方委員会に提出された請願書 (memorial, 賛同者の自署名入り) には、つぎのような要望が記されている。

われわれは、シリング・デーが5月26日から開始されるという執行委員会の決定を不安と驚きをもって迎えている。その日から、職工階層 (operative classes of people) が博覧会见物のため大挙してロンドンに押し寄せ、結果として上流階層の人々がその時期ロンドンを避けようとするだろう。毎年5、6月は富裕な層を相手とした大商いがウェストミンスターで行なわれるが、その期間が短縮されることは、それにかかわる商工業者たちに大きな損害を与える。われわれの提案は、5、6月は高額チケットの入場者に限定し、7月1日からシリング・デーを設定することである。そうすれば会期の4ヶ月がちょうど2ヶ月ずつに分けられることになり、またわれわれの商工業の大幅な損失も避けられる。ウェストミンスターの地方委員会は、博覧会の熱心な支持者であるわれわれの要望を執行委員会にしかと伝えてもらいたい。

このウェストミンスターの請願書については、しかし同じロンドンのメリルボーン (Marylebone) 地方委員会からただちに反対意見が表明された。

シリング・デーの延期を主張する請願書の理由説明は根拠薄弱と考える。下層の人々の入場をこのように長期間制限することは一般に受け入れられないだろうし、博覧会の利害だけでなく、職工階層に与えられるべき利益という観点からも望ましくない¹⁰⁾。

また、料金体系についてシェフィールドの市民会合で出されたさらなる実質的割引を求める意見が、王立委員会の事務局あてに送られている。

職人 (artisan) クラブに所属するもの、またはしかるべき登録を行なった者は、(ロンドンまでの) 鉄道切符を提示することで、週4日のシリング・デーは何度でも入場を認めるようにしてほしい¹¹⁾。

たしかに万博開催の効果は会場外の民衆にも及び、絵葉書の売り子や立ちん坊、物乞までもがその潜在的参加者となった。しかし、だからといって当時の識者はロンドンの夥しい数の貧民の存在から目を逸らしてはいけないと警鐘をならしている。そのひとりであったヘンリー・メイヒュー (Henry Mayhew) は、万博のヒーローたち (= 展示物の作り手) が満足に万博に参加できていないとして、無数の無辜の民、1シリングの負担でさえ重荷となる労働者のために「6ペンス・デー」を設けてはどうかと提案している¹²⁾。

労働者の入場料について、会場建物の設計者であるジョゼフ・パクストン (Joseph Paxton) はいっそう徹底した方針を主張した。彼によれば、

展示品の出品者にも入場料を課すことは、そもそも博覧会の実施を可能ならしめた労働者に対する課税に等しい。もし特権的な人々が独占して見物したいのなら、最初の二週間は労働者にも入場料を課すればよい。しかしそれ以降入場料は無料とするべきである。来たる労働の殿堂では、労働諸階層の技巧と能力が誇らしげに示されることであろう。何千ものこういった人々はロンドンへ来訪するためだけでも爪に火を点すような節約をしているのだから、さらに料金をとるべきではない。¹³⁾

パクストンの主張は、たんに料金体系の根本的な変更というにとどまらず、博覧会の理念を、ブルジョアのための産業繁栄の祭典から、労働者の祝典へと一変させるものであった。したがって王立委員会は、とうていパクストンの案をまともに取り上げようとはしなかったのである。結局前述のように、5月26日以降月曜日から木曜日までをシリング・デーとすることになったが、パンチ (Punch) 紙はこれにも批判的であった。つまり万博は一日1シリングで労働者に教育を施そうとしたが、労働者がいちばん参観しやすい土曜の午後はブルジョアの殿堂となり、割引はなかった、と。¹⁴⁾

もちろん水晶宮の内部の人間になるために、労働者たちは1シリングの入館料をはるかに超えた費用が必要だった。とくにロンドンから遠く離れた地方の住人にとっては、首都へ上京する旅費と宿泊施設を探して滞在費を支払うことはきわめて大きな負担となった。さきの不発におわった労働者中央委員会の第三の目的は、引き続き主催者側の課題として残されていたのである。労働者の受入については、実質上王立委員会と労働者をつなぐ窓口の役割を果たしていた地方委員会に、全面的に委ねるわけにはいかなかった。王立委員会は大量の労働者のロンドンへの受入にあたり、それによる無用の混乱を避けるため、早い段階から内務省と接触していた。同省の高官であったレッドグレイヴ (Alexander Redgrave) はロンドン来訪の労働者観客の誘導・整理の責任者を務めることになっていたが、とくに労働者の安価で効率的なロンドン移送、ロンドン市内での小ぎれいで適切な価格の宿泊所の提供、そしてロンドンの公共施設への労働者のアクセスの三点に留意していた。¹⁵⁾

混乱を避けるための具体的な対策も検討されていた。1850年11月1日付の手紙で、地方委員会との連絡を担当する特命委員を務めていたロイド (Col. J. A. Lloyd) は、王立委員のグランヴィル伯爵にあてて、つぎのような対策を提案している。すなわち、万博の観客を誘導し、必要によっては保護するような特別の役職を置くこと、その役職者は王立委員会とも連絡がとれるような信頼のおける人物であること。要は、労働者を中心とした観衆を好意的に遇することが彼らを懐柔することにもつながる。¹⁶⁾ レッドグレイヴは、中産階級向けに手配される宿のプランは提起されている一方で、未だ労働者階級向けの組織的プランは無いことについて、多いに危惧していた。そして、労働者のロンドン滞在にあたっての宿の斡旋方法についてメモを残している。彼の提案は、ロンドンの各駅に案内責任者 (chief guide) を配置

し、そこで労働者にたいしてその日に宿泊可能な部屋の情報を与える。そのさい、部屋の料金や間取りの表示したカードを準備する。ガイドの人選は、たとえば退役警官から行なうようにしてはどうか、¹⁷⁾といったものであった。

またレッドグレイヴは、会期中の6月9日と10日の月曜（精霊降臨日後の最初の月曜日、Whit Monday）・火曜が、多くの製造業地域で休日と重なるため、水晶宮が押し寄せる大衆で危機的な圧力を受けることを危惧していた。苦肉の策として、彼はその両日にロンドン在住者にたいして代替的催し（軍隊パレードや武器武具の展示会）を提供し、水晶宮を外来者に明け渡すことを提案したりしている。¹⁸⁾会期中のロンドンで地方や国外からの来訪者が経験した宿探しの労苦や、提供された宿泊施設の劣悪さについては当時深刻な問題として認識されていた。しかし、結局彼らに良質の宿を大量に提供するような公的・組織的計画は実行されなかった。ピンムリコ（Pimlico）埠頭の近隣に2エーカーの敷地を構え一晩一千人の労働者を収容する「モンスター」的宿泊施設を運営した一民間業者の試みも、¹⁹⁾経営的には失敗に終わった。

4 労働者は万国博をどう受け入れたか

こういった課題を残しながらも、主催者の目論みどおり、シリング・デーの設定によって多数の労働者・民衆が水晶宮に押し寄せた。本節では労働者たちがロンドン万博をどう受け入れたかについて、とくに19世紀なかばの労働者のレジャー（余暇のすごしかた）とのかかわりを中心に述べてみたい。

一般に19世紀の第二四半世紀の全般的動向を反映して、30および40年代は労働者の文化の上でも「過渡期」であったことが早くから強調されてきた。すなわち旧来の労働者文化が弱体化していく一方で、都市的産業社会に根ざした新しい文化はまだ必ずしも彼らのなかに根付いてはいなかった。労働者の余暇（レジャー）においても、伝統的な地域的共同体社会に根ざした催しや、各種のブラッド・スポーツなどは、中産階層により敵視されるようになり、より健全なレジャーへ転換する方向へ指導ないし強制された一方、労働者が新たに経験することになった職場での厳しい規律と長い労働時間の精神的代償として、彼らはむしろ欲望発散的な「不健全な」レジャーや傍若無人の無礼講にのめり込んでゆく一面もあった。中産階級にとって好ましくないこのような民衆的娯楽を制限しようとする諸協会や教会関係者は、²⁰⁾ブラッド・スポーツの禁止や、安息日の厳守を呼びかけ、市当局や警察も規制と禁止に乗り出した。健全なレクリエーションを推奨しようとする改革者たちは、政府および自治体による図書館や博物館、文化会館、オープン・スペース、遊歩道の建設と整備を提唱していた。一部の企業家は、自前で運動グラウンドや庭園を整備し、茶会や音楽クラスを開催した。²¹⁾そのような企業家の一人は、たとえば従来職工学院が提供してきたようなレクチャーや講演会

などはあまりに知的側面に偏りすぎているとみていた。²²⁾労働者はこういった健全なレジャーを徐々に受け入れるようになっていったが、一方で抵抗も根強く、企業家や改革者たちの望むような方向へ労働者のレジャーを誘導することは、なかなか困難な状況にあった。したがって、万博の見物はまさに改革者たちにとってまたと望み得ないような「健全」なレジャーを提供する舞台となるはずであった。

カニンガムはレジャー史における万博の意義について、しばしばつぎのようなイメージで受け取られていることを指摘している。一般に、19世紀なかばにレジャー史の新たな局面が到来したという広い合意がある。近代の産業社会・都市大衆社会のレジャーのパターンが今や明確な形をとりつつあったとも言われている。さらに、この時期に転換点を画したのはレジャーばかりではない。それは産業革命の危機的段階の終わりを告げただけでなく、労働者階級が政治的経済的そして社会的に産業資本主義の永続性を受け入れ、それを転覆させるのではなくそのなかでささやかな利益を得ようとした時代の始まりであった。その会場ではすべての階層が資本主義の成果をたたえた1851年の万国博は、新時代の到来の象徴でありサインであった。労働者たちは水晶宮内で健全なレクリエーションのメッセージに忠実にふるまっているように見えた。万国博は他の何にも増して、適切に組織されたレジャーが啓蒙化（文明化）作用を有しているという信条の、²³⁾祝福すべき確証であった。

事実19世紀なかばから後半にかけて、労働者の余暇をめぐる状況は大幅に改善されていった。法制の整備や労働組合の活動によって労働時間の短縮や土曜半休がしだいに多くの職場に普及し、一部の職場ではバンク・ホリデーや有給休暇の制度も導入された。多くの労働者を万国博に運んだ鉄道は、60年代には彼らを海辺のリゾートに運び始めた。²⁴⁾もちろんこういったレジャーの商品（商業）化は、19世紀なかば以降の大きな変化のひとつであった。さらにカニンガムによれば、この頃から盛んになっていった図書館や公共スペースのようなレジャーの場の公的な提供は、ある意味ではレジャーの商品化への対抗措置であった。いわば労働者をパブや劇場、ミュージック・ホールや競馬場のような商業的施設から図書館へ移動させる試みである。しかしその反面では公的性格と私的性格は密接に結びついており、明確な境界線を引くことは困難である。たとえば水晶宮は、ハイドパークでは公的に運営されシデナムへの移転後は私的組織となったが、いずれも文化的向上を楽しみと結びつけるというヴィクトリア時代の人々の願望を表明した好例である。²⁵⁾

一方ヒバードは2007年の論文において、「健全なレクリエーション」としてのロンドン万博が中和させようとした階級間の緊張にあらためて注目している。カニンガムも指摘しているように、19世紀初頭以来、改革者たちは階級融合の場となるような新たな形態のレジャーを創設しようとしてきたが、そこで想定されていたのはレジャーが個人と社会の改良につながるべきであるという「健全なレクリエーション」の概念であった。²⁶⁾同時にこの概念は、貴

族階級への批判のかたわら、労働者階級の意識改革のためにレジャーを定着させようとする中産階級にとって、その恰好の基盤を提供した。そして万博の組織者たちも、きらびやかな貴族趣味の蔓延に対抗しようとする一方で、街角の大衆文化の猥雑でデモニッシュな要素と雰囲気骨抜きしようと考えていた。しかしその過程で、健全レクリエーションを標榜する万博のレトリックは、皮肉にもその哲学が相殺しようとしていた階級的関心や不安をあからさまに示すことになったのである。むしろヒバードは、万博が「健全レクリエーション」の危うさと、楽しみと教育をバランスさせようとする世紀なかばの試みに付随した多大な困難さを確認させるものだったとみている。²⁷⁾

また万博見物が労働者にもたらした興味や関心の度合いや影響力について、否定的な評価がなされることもある。ガーニーは、ロンドン万国博百五十周年にあたる2001年に発表された論文において、労働者大衆向けに出版された雑誌や新聞の記事から万博の意味と表象をめぐる論争を取り上げ、万博に対する労働者の意識と反応を検討している。すでに職工学院などによる産業博覧会の催しにたいする労働者の関心の高さから明らかなように、そのような大衆メディアのいくつかは、率先して万博の開催を支持し、その宣伝につとめていた。しかし、『レイノルズ新聞』(Reynold's Newspaper) のように、万博を「大仕掛けの猿芝居(gigantic folly)」と呼び、労働者に現実政治から目を逸らすようにしむけようとするアルバート公の「ドイツ的」策略だと批判するものもあった。²⁸⁾ さらに同紙編集者の兄弟であったエドワード・レイノルズ(Edward Reynolds) は会期中の8月の記事で、次のように断じた。

労働者の存在なしには万博の開催はおよそ叶わなかったのであり、その社会的存在価値と意義を顕彰されるべきはずであったにもかかわらず、実際は万博の開催により貴族と中産階層だけが恩恵を受けており、労働者は物を作って利潤を貢ぐ人間機械のように扱われている。²⁹⁾

一方『ノーザン・スター紙』(Northern Star) は、閉幕後に労働者階層の観客は言われているほど多くはなかったと指摘している。すなわち、公称600万人の入場者数から通しチケット保持者や二回目以降のリピーター、さらに外国人参観者の数を差し引くと、225万人のイギリス人が参観したことになると推計し、これはさほど驚くべき数ではないという。そのうち、わずか100万人ほどが職人や労働者階層(artisan and dangerous order)と推計される。結局、1シリングの入場券と格安の鉄道運賃をもってしても、多くの労働者は参観できず、またする気にもならなかったものであり、いまだ労働者階層には深刻な貧困が蔓延していることを示している。³⁰⁾ さらに同紙によればより重要な事実は、

日々の労働環境の悪化というかたちで「競争」の弊害に辟易していた労働者たちが、競争をいっそう促進するという万博の趣旨と、それが標榜していた利己的な個人主義の風潮に敏感に反応した

ことである。もし誰もが富の創出と分配に様に参画できるような世界像をかかげた催しであれば、まったく同じ展示物であっても労働者は大挙して押し寄せたであろう。³¹⁾

さらに水晶宮内の展示品の分類方法も労働者観衆の立場を十分に考慮したものとは言いがたかった。アルバート公やプレイフェア (Lyon Playfair, エディンバラ大学化学教授) らが中心となって決定した展示品の分類方法は、抽象的な科学理論にもとづく分類を避け、一般の見物人と専門知識を有する識者の双方が膨大な展示物の体系を理解できることを重視したものであった。結果として原料・機械・製品・美術の四大部門とそれをさらに30クラスに分けるという方法が採用された。見物する大衆に「モノが実際につくられる過程」を具体的・視覚的に理解させようとする教育的配慮が意図された展示法といえよう。しかしそのような意図とはうらはらに、この展示方法の評判はけっして芳しいものではなかった。首都衛生協議会 (Metropolitan Sanitary Association) のカーライル伯爵は、個々の展示品が実際に生産される場の不衛生な環境を念頭に置きながら、万博は「労働の尊厳」を祝福し労働の殿堂としての展示が志向されているにもかかわらず、その展示の力点は生産ではなく消費に置かれていると批判している。プレイフェアによる四大部門分類法は労働者自身を見えなくしてしまうものであり、労働を展示するという理念にふさわしいものではなかった。この点では、インド・コーナー (Indian Court) に展示されたインド人労働者のミニアチュアはのちの博覧会で定番となった植民地原住民村落の生活模型展示を彷彿とさせるものだったが、こちらのほうがよほど生きた労働と生産を再現していたとも言える。³²⁾

最後にふたたびレイノルズ新聞の表現を借りよう。水晶宮を飾った展示品はほかならぬ労働者が作り出したものであり、彼らはこの催しをなんとしても労働者のための祭典にしてほしかったのである。にもかかわらず、アルバート公のスピーチでも、主教や貴紳たちのスピーチでも (オックスフォード主教のようなごく一部を除けば) これら華々しい品々が実際にどこからどうやって生み出されて来たのかについて、けっして言及されることはなかった。かくて、労働者にとって1851年のお騒がせな茶番狂言 (monster bubble) は終わっていった。³³⁾

5 水晶宮内の労働者の「幸福感」：むすびにかえて

うへのノーザン・スター紙のあげる職人・労働者階級の観客100万人という数字は、今となっては検証のしようもないが、よしその数字が実態に近いものであったとしても、その絶対値を「少なすぎる」と直ちに断じることは適切ではないし、たんに数の大小の問題として捉えるとポイントをはずすことになる。本稿は、労働者たちがロンドン万博をどう受容したかを一方の軸として考察してきたが、ここでは、ひとつの催しとしては空前の規模で押し寄せた労働者が、水晶宮の内部で抱いた満足感ないし「幸福観」について推察することで、む

すびにかえたい。

当時多くの人々は、シリング・デーの開始とともに、観客階層が一変してしまうと予想していた。しかし開始日の入場者はわずかに2万人（一日平均入場者数をはるかに下回っている）で、どちらかといえば中産階層の入場者が多く、上流階級の面々も見受けられたという³⁴⁾。日ごとに労働者の観客数は増えていったが、その見物のマナーも一禁酒となっている会場で酒瓶を持ち込んでピクニック風のランチの場としたり、貧相な身なりの婦人が展示品の彫刻に腰掛けて授乳をしたりしたことには識者は苦言を呈したが—おむね賞賛に値するほど良好なものであった。のみならず、万博終了後その顛末記を出版したジョン・タリス（John Tallis）は、つぎのような点に注目している。5シリング・デーの観客が会場建物身廊中央部の華やかなエリアと見世物に関心を集中させていたのにたいして、地方から来た観客や労働者たちはきらびやかな物より実際に見たい展示品、機械類や工業製品のコーナーである建物の脇のほうに流れていった。いわば富裕な観客はお互い見て見られることを目的としていたのにたいし、1シリング客は展示品自体から教えと情報を得ようと真剣であった。結果として、彼らは「上品な」観客よりもずっとその場にふさわしく見えたのである。³⁵⁾

水晶宮内で彼らは自らの労働の成果が「文明開闢」以来一堂に会する光景を目の当たりにして、誰しも等しく驚愕と興奮を覚えたことであろう。あるいはそれを「文明的幸福感」と表現して良いかもしれない。ある者はクライミング・ボーイ委員会（Climbing Boys' Committee）により金賞を与えられたという、少年の仕事を代替する煙突掃除器具を見て、はるか若い時期の苦難を思いそれが自己体験としても時代としても過去の事実となろうとしていることに感慨をおぼえたかもしれない（すでに1830年代に少年による煙突掃除は禁止されたが、実際にはまったく過去形になったわけではなかった）、ある者は、労働者階級生活改善協会が出品した労働者用各種モデル住宅を、近い将来の身近な夢として眺めたかもしれない。さらにリヴァープールの金属加工業者（Joseph Mayer）が出品した、イギリス中心の世界観を露骨に凶柄化した銀製トレイ—絵柄としてヴィクトリア女王を中央に配し、その「姉妹」であるヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカに女王の慈愛の右手が差し伸べられ、一段低い位置には各地域を代表する商品とイギリス商品との取引が描かれている—を見てイギリス国民としての自尊心をくすぐられなかった者はごく少なかったであろう。良く知られているようにトマス・リチャーズは、消費主義的幸福感とも言うべき事実を指摘している。ロンドン万博は膨大な商品の集合体を一堂に会する最初の機会を広く一般向けに提供しただけでなく、そこに集ったすべての観客自らが商品交換の積極的な関与者となりうるという意識を覚醒させたのであり、多くの労働者もまたそのような観客に含まれていたのである。³⁶⁾

近年の研究では、社会的秩序と階級統合の象徴としてのロンドン万博というイメージとは

逆に、階級・地域・職業・人種・性差といった深い社会的亀裂を露呈した催しであったことが強調されており、レジャー史ないし文化史における万博の位置づけにおいてもそのような傾向がみられる。しかしその一方で、アウアバックは、水晶宮はそれぞれの人々が快適に感じる場所を合成したものであるとも表現している。シリング・デーの開始まで抱かれていたさまざまな懸念はおおた消え去り、夏頃には展示品というよりも、階級を超えて集う人々こそ、会場の「見もの」となっていた。万博は人々の社会的結合、つまり全国民が同じ社会に住んでいるという意識を高める一方で、ヴィクトリア朝イギリス社会の深い階級的断層を改めてあらわにした。しかし万博により1848年のわずか3年後には「革命は月の落下と同じくらい絵空事になってしまった」というマコーレーの表現が端的に示しているように、分離のモメントを伴いながらもイギリスをひとつの国家(nation)とした催しであった。³⁷⁾水晶宮内では、どの観客にとってもその階層のみならず、個人的趣向、職業、出身地、宗教等々の差異に応じたそれぞれの興味と関心が満たされ、それぞれの観客に「場」が与えられた。³⁸⁾これほど多くの労働者を水晶宮に集めたのは、その主催者たちないし中産階級が期待していたような、この催しを「健全な」レジャーとして受容し、それによって満足を得ようとする労働者側の態度・意図であったとみることは適切ではあるまい。むしろ会場で、そして「社会」で場が与えられているという意識を多少とも持ったとすれば、もしかするとこのこと自体、労働者が水晶宮のなかで感じた最大公約数的な幸福感といえるかも知れない。労働者たちはだれか他の者の期待に応えるのではなく、彼らなりのやりかたでロンドン万博を受容したのである。

注

本稿は、2011年11月19日に甲南大学で開催された2011年度日本ヴィクトリア朝文化学会大会における「ヴィクトリア時代の人々はいかに幸福であったか」と題したシンポジウムでの報告内容に基づくものである。パネリストの有江大介氏(横浜国立大学)、小田川大典氏(岡山大学)、小野塚知二氏(東京大学)、そして会場校責任者の井野瀬久美恵氏との有益な議論に感謝したい。

- 1) Hibbard (2007), pp. 157-158; Chase & Leveson (2007), p. 131.
- 2) WA/II/95.
- 3) Minutes of the Sixteenth Meeting, appendix(C). なお、博覧会開催のため労働者諸階級から寄附金を徴募することはこの委員会の目的ではなく、それはすでに全国の地方委員会によって進められているとの注記がある。
- 4) Minutes of the Sixteenth Meeting.
- 5) Message & Johnston (2008), pp. 36-37; Auerbach (1999), pp. 129-131; Leapman (2001), p. 62.
- 6) Auerbach (1999), p. 134.
- 7) Minutes of the Seventeenth Meeting, appendix(F); WC/III/70; Auerbach (1999), p. 135.
- 8) WC/III/58; Minutes of the Fifteenth Meeting, appendix(D) にも収録。

- 9) CP/1851/70, この地方委員会ではどうやら万博の会期が4ヶ月と誤解されているようである。
- 10) 1851年2月24日, CP/1851/63.
- 11) 1851年2月27日, CP/1851/68.
- 12) Message & Johnston (2008), p. 41.
- 13) Davis (1999), pp. 101-102.
- 14) 引用は, Message & Johnston (2008), p. 37.
- 15) Auerbach (1999), pp. 135-136.
- 16) WC/V/23.
- 17) CP/1851/134.
- 18) Leapman (2001), p. 194.
- 19) Auerbach (1999), pp. 142-143.
- 20) Bailey (1978), pp. 18-21.
- 21) Bailey (1978), p. 38.
- 22) Bailey (1978), pp. 42-43.
- 23) Cunningham (1980), p. 140.
- 24) Bailey (1978), pp. 80-81. カニンガムは基本的にはレジャー史の連続性, すなわち伝統的とされているレジャーがしばしば産業革命の変動をかいくぐって生き延びたことを重視しているが, その一方で世紀なかばをレジャー史の転換点と見なすのには十分な理由があるとも指摘している。そのさい彼が注目しているのが, 鉄道の役割である。この時期およそ鉄道に何らかの影響を受けなかったレジャーこそなかった。鉄道はレジャー史においても偉大な技術的突破口の役割を果たしただけでなく, 様々なレジャー施設の発展の相互関連性および類似性を付与することにより, 19世紀なかば以降のレジャー史を, 多種多様のレジャーではなくひとつのレジャー史とする力を提供したのである。Cunningham (1980), p. 178.
- 25) なお, シデナムでの開場式で女王はつぎのような式辞を述べたが, カニンガムによればこれはまさに健全なレクリエーションの神髄にふれた表現となっている。「数々の美的宝物と知識を収納したこのすばらしい建造物は, わが臣民すべての者の精神を高め教導すると同時に, 喜び楽しませるものであることを希望する。」Cunningham (1980), pp. 155-156.
- 26) Cunningham (1980), pp. 89-90.
- 27) Hibbard (2007), pp. 158-159. なおタイムズ紙は, 万博が大衆の好みに迎合することを戒める一方で, 水晶宮会場内でオルガンによるBGMを流すことを提案した。そのさい同紙は, あくまでも添え物 (adjunct) として控えめに提供, 万博の趣旨を損なわないことを強調しているが, これは楽しみが教育に勝ってしまうことを危惧する声が高かったことを示す一方で, 同紙もその両者の間でいかに逡巡していたかを物語っている, という。結局ヒバードによれば, 健全レクリエーションをめぐる言説の中心点にあったのは, 厳粛さ “seriousness” の社会的再現をエンターテインメント自体の領域に持ち込むことにより, 自らの権威を主張しようとする中産階級の努力—というより, いらだった試み—であった。Hibbard (2007), pp. 155, 159-160.
- 28) Message & Johnston (2008), p. 42; Gurney (2001), pp. 116-118.
- 29) Gurney (2001), pp. 121-122.
- 30) Gurney (2001), p. 120.

- 31) Gurney (2001), p. 121.
- 32) Message & Johnston (2008), p. 42.
- 33) Gurney (2001), p. 122.
- 34) Gurney (2001), p. 119; Auerbach (1999), p. 151.
- 35) John Tallis (1852), *Tallis' History and Description of the Crystal Palace, and the Exhibition of the World's History in 1851*, I, p. 101, 引用は Auerbach (1999), p. 156.
- 36) Richards (1990), pp. 17-18.
- 37) *Life and Letters of Lord Macaulay*, II, p. 248, 引用は Auerbach (1999), p. 158.
- 38) Auerbach (1999), pp. 156-158.

参 考 文 献

《資料》

- Correspondence and Papers, Royal Commission for the Exhibition of 1851. (CP と略記し、そのあとに資料番号を付する。)
- Minutes of the Meetings of the Commissioners appointed by Her Majesty for the Promotion of the Exhibition of the Works of Industry of All Nations, to be holden in the year 1851 (Jan. 11th, 1850~, 王立委員会資料番号 8A/I).
- Windsor Collection, Royal Commission for the Exhibition of 1851. (WC と略記し、そのあとに資料番号を付する。)

《二次文献》

- Auerbach, J. A. (1999), *The Great Exhibition of 1851: A Nation on Display* (New Heaven: Yale U.P.).
- Bailey, P. (1978), *Leisure and Class in Victorian England: Rational Recreation and the Contest for Control, 1830-1885* (London: Routledge & Kegan Paul).
- Chase, K. & M. Leveson (2007), "Mayhew, the Prince, and the Poor: The Great Exhibition of Power and Dispossession", Buzard, J., Childers, J. W. & E. Gilloody (eds.), *Victorian Prism: Refractions of the Crystal Palace* (Univ. of Virginia Press), pp. 123-137.
- Cunningham, H. (1980), *Leisure in the Industrial Revolution c. 1780-c. 1880* (London: Croom Helm).
- Daunton, M. (2007), *Wealth and Welfare: An Economic and Social History of Britain 1851-1951* (Oxford U.P.).
- Davis, J. R. (1999), *The Great Exhibition* (Stroud: Sutton Publishing).
- Gurney, P. (2001), "An Appropriated Space: The Great Exhibition, the Crystal Palace and the Working Class", Purbrick, L. (ed., 2001), *The Great Exhibition of 1851: New Interdisciplinary Essays* (Manchester U.P.), pp. 114-145.
- Hibbard, A. (2007), "Distracting Impressions and Rational Recreation at the Great Exhibition", Buzard, J., Childers, J. W. & E. Gilloody (eds.), *Victorian Prism: Refractions of the Crystal Palace* (Univ. of Virginia Press), pp. 151-167.
- Hilton, B. (2006), *A Mad, Bad, & Dangerous People?: England 1783-1846* (Oxford U.P.).
- Hoppen, K. T. (1998), *The Mid-Victorian Generation 1846-1886* (Oxford U.P.).

- Leapman, M. (2001), *The World for a Shilling: The Story of the Great Exhibition of 1851* (London: Headline Book Publishing).
- Message, K. & E. Johnston (2008), “The World within the City: The Great Exhibition, Race, Class and Social Reform”, Auerbach, J. A. & P. H. Hoffenberg (eds.), *Britain, the Empire, and the World at the Great Exhibition of 1851* (Aldershot: Ashgate), pp. 27-46.
- Richards, T. (1990), *The Commodity Culture of Victorian England: Advertising and Spectacle, 1851-1914* (Stanford U.P.).
- Thompson, E. P. (1963), *The Making of the English Working Class* (London: Victor Gollanz), 邦訳：E. P. トムソン『イングランド労働者階級の形成』（市橋秀夫・芳賀健一共訳，青弓社，2003年）。
- 川北稔編（1987）『非労働時間の社会史：英国風ライフ・スタイルの誕生』（リプロポート）。
- 重富公生（2011）『産業のパクス・ブリタニカ：1851年ロンドン万国博覧会の世界（コスモス）』（勁草書房）。
- 松村昌家（1986）『水晶宮物語』（リプロポート）。